



第七十九号

お芝居の仕事

メルマガnoichi79号。今年最後のメルマガは「お芝居の仕事」。
平成二十九年は歌舞伎の地方(じかた)に縁がありました。
一ヶ月公演の責任を果たすことは、我が家の大切な伝統であります。



今年秋から暮れにかけて、私の身辺は多忙になりました。お仕事ではリサイタルの賛助出演、各地稽古場のおさらい会、学校公演、歌舞伎の地方（じかた）など、毎日のように違う場所へ通って、一切の抜けない日々を過ごしました。プライベートでは九月に子供が生まれ、妻子は二ヶ月ほど里帰りしていましたが、一緒に住むようになってからのここ二ヶ月は、子供中心の生活（当然ですが）となり、今は育メン実習中でございます。お陰様で娘は日に日に大きくなっており、成長を頼もしく思っております。

さて、今月は一年最後のメルマガということで、何を書こうかとなんとなく一年を振り返ってみました。今年はずらも新橋演舞場の「黒塚」に始まり、歌舞伎座の「楊貴妃」に終わるという、芝居に始まり、芝居に終わる一年となりました。名実共に劇界の頂点とされた人間国宝・坂東玉三郎丈、次世代を担う実力派・市川猿之助丈と交流させて頂けたことは、私の大きな糧となり、また、励みとなりました。

玉三郎丈には、正派邦楽会が九月に国立劇場で開催した「唯是震一三回忌追善演奏会」において、特別出演をご快諾頂いたことにより、祖父の代表作である「楊貴妃」を久しぶりに上演させて頂く私どもの希望が叶いました。また、正派の機刊紙「楽道」では、恐れ多くも対談をさせて頂き、直接お話しを伺える有り難い機会となりました。さらに、十二月には「楊貴妃」を一ヶ月歌舞伎座で上演する運びとなり、連日沢山のお客様に唯是震一の音楽を聴いて頂けたことがとても嬉しく、天国の祖父もさぞかし喜んでくれたことと思います。玉三郎丈からは、「楊貴妃」で私が担当した胡弓の奏法について沢山のご助言を下さり、何度か実演も交えながらのご指導も頂き、なかなかご期待に応えられなくて歯痒いことでしたが、私のような若輩を気に掛けて下さるお心遣いが有り難く、とても幸せな時間でした。度重なるご厚意を無駄にしないよう、お稽古に励みたいと思います。

市川猿之助丈は、私と同じ年代を生きる歌舞伎界のホー

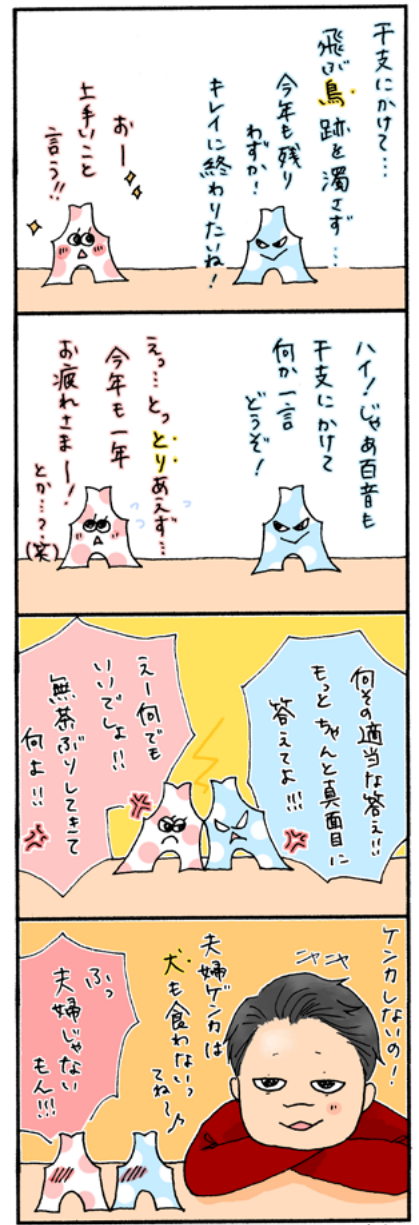
プであります。新春の「黒塚」でさらなる高みへと達し、多くの歌舞伎ファンを唸らせました。しかし、十月にスーパースタールの公演中に骨折という大怪我に見舞われ、大変心配されましたが、持ち前の前向きな性格は既に「怪我の功名」と捉えておられる御様子で、来年一月には早々と舞台復帰の予定と、凄い気迫を見せておられます。猿之助丈は、昨年私の祖父が他界した頃から私のことを気に掛けて下さるようになり、一緒にお食事をさせて頂いたり、お手紙やメールのやりとりをさせて頂くようになりました。ご性格がとても明るく、行き届くお心遣いをされる方という印象です。

歌舞伎界を牽引するような超一流の人は、常人では考えられない仕事量をこなしています。私が側で見ている、そのバイタリテイには驚かされることばかりです。幼少期からその環境に身を置き、英才的に鍛え上げられたからこそ成せる業でもあると思いますが、一番のエネルギー源は、何よりも「芸が好き」であることだと私は思います。裏を返せば、古典芸能の世界には、超一流の人が熱中出来るほどの魅力があるとも言えます。むしろこれは他人事ではなく、私が私の人生でどれほど芸を研究し、また没頭できるか、それが私の身にそのまま返ってくるものと思っております。

私の曾祖父・中島雅楽之都が遺してくれた「黒塚」、祖父・唯是震一が遺してくれた「楊貴妃」、今年は二つの演目を通じて自分が成長させてもらいました。これからも家の芸を守り、後世に伝え残していければと思っております。いつも側で見守ってくれる祖母が元気でいてくれることが何よりも心強いことです。

今月のメルマガはお芝居の話に終始してしまいましたが、今年、私が最も刺激を受けた出来事として今の思いを残しておきたい、ご報告を兼ねて書かせて頂きました。

奥田雅楽之一



よいお年をお過ごしてください... じかた
Illustration: morimoe



◎あとかぎ◎

楊貴妃というと、世界三大美女と教わったけれど、府に落ちなかった。後になって、外国の人が小野小町を知ってるわけがないと気がついた。日本人は江戸時代から様々な番付を作っていた。花魁、温泉、料理、ランキングが本当に好きだ。楊貴妃も西洋の人で知っている人は多くないだろう。世界三大美女はあくまで日本でのベスト3だった。

楊貴妃と聞くといつも思い出すのは、胡臭という男性を惑わす体臭の持ち主だったという話。胡臭という今ではわきがと訳されてしまうのだが、とてつもないいい香りのわきがあるそう。胡は元々は中国の北西の民族のことを差したそう。後に西胡とも言われ、ペルシャなど、もつと西の文化や民族を意味する言葉になったと言われる。蔑称にはじまって、西に対する怖れと憧れを含んでいるのではないかと思われる。胡弓の胡にもそういうニュアンスがあるだろう。

今回は楊貴妃が好きだったと言われる牡丹の写真を試してみた。もうすぐ上野などでは寒牡丹のシーズンになる。ちなみに上の写真は仏手柑。昔から絵の題材になってきた縁起物の柑橘。よいお年をお迎えください。

グラフィックデザイナー (http://www.1938.jp) みやはらたかお

